

# としょかんNEWS 第106号



～新春特大号～

2016年1月18日  
湘北短期大学図書館

## 学生選書ツアー参加者募集

学生選書ツアー【第23弾】を下記の要領で実施いたします。“学生選書ツアー”とは、図書館の利用者である学生自らが図書館にあったらいいと思う本、友達にオススメしたい本を、実際に書店の店頭で手にとって選書するという企画です。また、参加者の皆さんには、店頭で選書をするだけでなく、選んだ本を紹介するポップの作成など展示コーナーをプロデュースしていただきます。ご参加いただいた方には、**湘北ポイント100pt**とさるーちオリジナル卓上カレンダーをプレゼント！お友達をお誘い合わせの上、是非ご参加ください。



- 日程:2月3日(水)
- 時間:10:00～12:00
- 場所:有隣堂 厚木店

## ● 注意事項

- (1) 選書の時間は限られていますので、下調べをしてから参加してください。事前選んだ本のリストなどを当日持参することをお勧めします。
- (2) 選書ツアー終了後に、それぞれが選んだ本を紹介するポップを2点程度作っていただきます。選んだ本については、特別貸出が可能です(冊数制限なし)。
- (3) 選書冊数は、一人20冊を目安としてください。ただ、厳密に何冊までという決まりがあるわけではありませんので冊数を越えてしまう場合には、ご相談ください。
- (4) マンガや雑誌、シリーズ(多巻)ものは、対象外となります。ケータイ小説、タレント・ミュージシャン・スポーツ選手などの本、ドラマ・映画のノベライズは一人1冊までとなります。同じテーマの本を複数冊購入することはできません。多くの学生さんに利用してもらえるような本を選びましょう。



## ● 申込方法

申込みフォーム(<http://goo.gl/forms/1gPElgSYiT>)よりお申し込みください。

申込期限は、**1月25日(月)**までとなります。

詳細については、追って E-mail にてご連絡いたします。



QRコードを読み取って  
スマートフォンからも  
申込みができます！

## さぼーち倶楽部、活動報告

### ● クリスマスパーティーで、第11回ビブリオバトル開催！

さぼーち倶楽部が12月12日(土)に恒例のクリスマスパーティーを行い、その中で第11回ビブリオバトルを開催しました。さぼ部5名と図書館職員3名が参加し、総勢8名がそれぞれ持ち寄った本を紹介、ディスカッションを行いました。テーマは映画やドラマ、アニメなど映像化された本(原作)。ビブリオバトルのあとは、クリスマスケーキを食べながら懇親会で盛り上がりました。

#### 第11回ビブリオバトル「チャンプ本」発表！

参加者全員で投票した結果、下記のとおりチャンプ本が決まりました。

★ショーン・タン著『ロスト・シング』-Nさん(C1)



### ● 明治学院大学横浜キャンパスビブリオバトル観戦！

クリスマスパーティーのあとは、さぼ部2名と図書館職員2名が明治学院大学横浜キャンパスに移動し、学生サポーター企画のビブリオバトルを観戦しました。横浜キャンパス30周年を記念して企画されたイベントです。30周年のテーマ「結び、繋ぎ、そして未来へ」にちなんだ本を持った学生、教職員、卒業生がバトルに参加。前半5名、後半4名にわかれて、力強く、個性豊かにオススメの本が紹介され、それぞれの本の世界に引き込まれました。質問タイムでは、さぼ部学生も積極的に手を上げて質問し、バトルを盛り上げました。チャンプ本に選ばれたのは下記の3冊です。

★前半戦：『時代の正体-権力はかくも暴走する』(神奈川新聞「時代の正体」取材班編 現代思潮新社)

★後半戦(同点2冊)：『意味への意思』(V・E・フランク著/山田邦男監訳 春秋社)

『西脇順三郎詩集』(西脇順三郎著 岩波文庫)

「湘北ではいつもごちんまりとやっていて、大勢でのビブリオバトルは初めてでしたが、楽しいですね。企画も司会進行も学生がやっていますすごい！」哲学書はむつかしそうと思って敬遠していたけれど、読んでみたら面白いかもしれないなあ…」学生たちは、新たな気づきや大きな刺激を受けていました。これからのさぼ部の活動に、ご期待ください。

ビブリオバトル終了後には、温かい飲み物とお菓子を囲んでの茶話交流会にも参加。図書館サポーターの学生同士での情報交換をしたり、図書館内をご案内いただいたりするなど、交流を深めました。今後も継続してお付き合いをするべく、連絡先も交換。明治学院大学学生サポーターのみなさん、ありがとうございました。今後とも、よろしくお願いいたします。



## ● 全国大学ビブリオバトル 2015～首都決戦～観戦！

12月23日(水)に開催された「全国大学ビブリオバトル 2015 首都決戦」をさぼ一ち倶楽部の学生1名と図書館職員3名で観戦しました。全国大学ビブリオバトルは2015年に全国各地の予選会・地区決戦が180回行われ、総勢914名の学生がバトラーとして参加。首都決戦は、その地区の予選会を勝ち抜いた学生30名による本戦です。当日は複数会場に分かれて準決勝、その後チャンプ本に選ばれた5名による決勝ステージが大ホールで行われました。決勝戦まで勝ち残ったバトラーによる熱意あふれるプレゼンテーションで会場は盛り上がり、グランドチャンプ本には『僕が20世紀と暮っていた頃』(野田秀樹著/中央公論新社)が選ばれました！

さぼ一ち倶楽部のビブリオバトルでは、テーブルを囲んで和気あいあいと自分たちが好きな本を紹介し合っていますが、他大学の学生さんや地域の方々もまじえた対戦型のビブリオバトルにもチャレンジしてみたいですね。

## ● ビブリオバトルとは ～公式ルール～

1. 発表参加者が読んで面白いと思った本を持って集まる
  2. 順番に一人5分間で本を紹介する
  3. それぞれの発表の後に参加者全員でその発表に関するディスカッションを2～3分行う
  4. 全ての発表が終了した後に「どの本が一番読みたくなったか？」を基準とした投票を参加者全員で行い、最多票を集めたものを『チャンプ本』とする
- (※ ビブリオバトル公式ウェブサイト <http://www.bibliobattle.jp/> より)

ビブリオバトルを授業やゼミ、サークル活動等に取り入れてみませんか？  
詳しくは図書館までお問い合わせください。

---

### 【連載】リレーエッセイ(26) 魔法にかからなかった我が家

財務部 山口 良治

家族が増えたことで狭い我が家に、荷物が溢れかえり、片付けたい衝動に駆られていた。年末から長期休暇に突入するため「このタイミングで何か良い片付け方法はないだろうか」と考えていたところ、タイミングよく図書館からリレーエッセイを頼まれたので、以前から気になっていた国内外でベストセラーとなった近藤麻理恵『人生がときめく片づけの魔法』『人生がときめく片づけの魔法 2』(2011.2012,サンマーク出版)を読んで、実際に片付けを実践してみることにした。

この本には、整理収納法をまとめたもので、様々なテクニックが書かれていたが、実践すべきことはただ一つ。「ときめくモノを残し、ときめかないモノを処分する」ということである。それを完璧に実践すれば、一度の片付けで二度と元の散らかった状態に戻らなくなり、更に、人生がときめくような感覚を覚え、ドラマチックに人生が変化するという状態になるらしい。

善は急げと早速実践してみたところ、難問にぶつかってしまった。モノを「処分できない」のである。一つ一つモノを触って確認しても、

心がルンルンするようなときめきが全く起きないため、本来ならば全て処分すべきなのだが、なかなか捨てるという行為に踏み切れない。結局、部屋をきれいに整理整頓しただけで我が家の片付けは終わってしまった。恐らく、来年の年末も同じ作業をすることになるだろう。

どうやら失敗した原因は、読み直してみると、「過去に対する執着(お金を出して買ったのもったいない)」と「未来に対する不安(いつか使うかも)」に私自信が縛られていたためのようなのだ。あまり物事を深く考えず、直観的に捨てる判断をした方がうまくいったような気がする。結局、「ときめくモノを残し、ときめかないモノを処分する」という、この著者の根本的な部分が理解できなかった。

今回、残念ながらあまり良い結果は得られなかったが、本の随所に書かれていた「モノに感謝する気持ち(作った人への感謝)」に気づかせてくれたことは無駄ではなかった。是非、大片付けを予定している方は、読んで片付けの魔法にかかり、自分の理想の部屋、理想の暮らしを実現してみてもはどうでしょうか。

1890年、和歌山県沖で遭難し約590人が犠牲になった軍艦エルトゥール号への救援活動、両国の絆を示す出来事として今も語り継がれる。小説や落語にもなり、年末には映画も公開予定だ(『日本経済新聞』2015年10月27日付「春秋」)——この遭難した軍艦はオスマン=トルコ帝国の艦船であり、日本でトルコのことが話題になるときは、何らかの事件があったときである。このときは、10月25日午前7時頃、渋谷区神宮前のトルコ大使館前で繰り広げられたトルコ人とクルド系トルコ人の乱闘騒ぎによる。クルド人は「国をもたない世界最大の民族」といわれ、人口3000万~4000万と推定され、第1次世界大戦で敗北したオスマン帝国の国境画定に当り、英仏により彼らの居住地が分断されたことに起因する。

この映画は日本とトルコの合作映画であり、昨年12月5日に封切られた。日本とトルコの関係史として、1890年と1985年を結ぶ。前者は上記のことであり、後者は「イラン・イラク戦争に伴いフセインはイラン領空の航空機無差別攻撃を宣言。各国は自国民の救出に動くが日本には手立てがない。多くの在留邦人の身に危機が迫っていた」という状況下に、トルコ政府は95年前の恩返しとして、日本人のため救援機を飛ばしたというのだ(脚本・小松江里子／著・豊田美加『海難 1890』小学館、2015年)。

さて、エルトゥール号の遭難を教材化した事例がある。現在も使用されている、東京書籍『新しい社会6・上』である。同書では、まず「ノルマントン号事件と条約改正」と題して「ノルマントン号事件をえがいたまんが」が掲げられ——これはピゴアの諷刺画である——、「1886年のことです。和歌山県沖の海で、イギリスの貨物船ノルマントン号がちんぼつしました。このとき、西洋人の船員は、全員ボートでのがれて助かり、日本人の乗客は、全員おぼれて死にました。イギリス人の船長は、日本人を救おうとしたが、ボートに乗ろうとしなかったなどと証言し、イギリスの領事裁判で、軽いばつを受けただけでした。日本人は、このような結果をもたらした不平等条約を改めることを強く求めました」と説明されている。ついで「エルトゥール号のそうなん者を救った大島の人々」と題して、「日本と同じく欧米諸国との不平等条約に苦しむトルコは、1890年に日本を訪れました。親善の行事を終えて帰国する途中、トルコの軍艦エルトゥール号は、和歌山県沖の海で、ちんぼつしました。この時、大島(和歌山県串本町)の人々は、そうなん者の救助や手当てなどにつくし、全国からも多くのお金や物資が寄せられました。大島には、慰霊碑が建てられ、現在もトルコとの間に交流が続いています」とある。

ところで、この事件は学習上どのように取り扱われ

るのであろうか。村上忠君氏は「国際的資質を育てる小学校社会科歴史学習—『ノルマントン号事件』と『エルトゥール号の遭難』を事例として—」を著わした(『小学校の“優れた社会科授業”の条件』所収、明治図書、2007年)。氏は、序において「小学校の歴史単元では、国家間の利害関係や時事問題の解決を考察していくことは段階的に難しいので、『国際友好』に関する単元を構成していくのが適切であろう。具体的には、『人の働き』を、国家という枠組みを超えた個人が歴史に果たした働きとしてとらえることを通して、国際化を考えさせていき、『国際的資質』を育てていくのである」と述べる。最後に「意義」として3点をあげる。そのうち2点目に、「また『ノルマントン号事件』を位置づけたことは、当時の国際社会における列強諸国の力と、わが国の立場を理解する上で有効であった」とある。

しかし、この記述こそが「国家間の利害関係」を示すものではないのか。条約改正の筋道を理解させるのに、国家間の利害関係を抜いては説明しようがない。上掲の教科書には、「外務大臣の陸奥宗光は、そのころもっとも力の強かったイギリスを相手に交渉を行い、ついに1894年、条約の一部を改正して領事裁判権をなくすことに成功しました。イギリスとの条約改正に成功した背景には、このころアジアでロシアと対立していたイギリスが、日本の協力を求めていたという事情もありました」とある。このことこそ、国家間の利害関係が根底にあることを示している。それでも小学6年生段階では理解できないと言うのであろうか。不可解な見解であり、村上氏が世の風潮におもねているようにさえ見える。

また村上氏は「『遭難者を助けるのは当たり前』という知的理解から、大島の海の民の献身的な救助活動を共感的に学ぶことを通して、国境を越えた人としての働きをとらえることができたようである」とも述べる。東日本大震災の際、作家の梁石日氏は「人間は本質的に、協力したい、困っている人を助けたいという気持を強く持っている生き物。おぼれている人を見れば、見過ごすことはできない。協力しあわなくては復興は成し遂げられないし、人間の力をはるかに超えた途方もない自然への畏怖の念を持ったうえで、きずなを築いていかなければいけない。そこでは新しいことが起こりうるんじゃないでしょうか」と予見された(『毎日新聞』2011年3月22日付)。しかし現実はどうなのか、今後検証していく必要がある。

私は映画評はほとんど見ていないが、唯一「難破寸前のトホホ」と安倍晋三首相を揶揄していた記事は目にした(『日刊ゲンダイ』12月26日付)。首相には「民衆の善意を政治利用するな!」とだけ言いたい。